

■configureオプションの比較

- Windowsでソースからのインストールを実施する場合、config.plファイルを編集してオプションを記述します。
- config.pl上で設定できるパラメータと記述内容を[Windows - config.plへの記述方法]列に記載しています。

UNIX		Windows		インストールでのインストール内容	PostgreSQL Documentでの説明
configureオプションの記述方法	ソースからのインストール デフォルト値	configure.plへの記述方法	デフォルト値		
--prefix=PREFIX	/usr/local/pgsql	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	/usr/local/pgsqlではなく、PREFIXディレクトリ以下に全てのファイルをインストールします。
--exec-prefix=EXEC-PREFIX	/usr/local/pgsql	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	アーキテクチャ依存のファイルをPREFIXの設定とは別の接頭辞EXEC-PREFIX以下にインストールすることができます。省略した場合、EXEC-PREFIXはPREFIXと同じに設定され、アーキテクチャに依存するファイルも非依存なファイルも同じツリー以下にインストールされます。ほとんどの場合、これが望まれています。
--bindir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/bin	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	実行可能プログラム用のディレクトリを指定します。デフォルトではEXEC-PREFIX/binであり、通常/usr/local/pgsql/binとなります。
--sysconfdir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/etc	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	各種設定ファイル用のディレクトリを設定します。デフォルトではPREFIX/etcです。
--libdir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/lib	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	ライブラリや動的ロード可能モジュールをインストールする場所を設定します。デフォルトはEXEC-PREFIX/libです。
--includedir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/include	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	CおよびC++のヘッダファイルをインストールするディレクトリを設定します。デフォルトはPREFIX/includeです。
--datarootdir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/share	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	いろいろな種類の読み取り専用データファイル用のルートディレクトリを設定します。これは後述のオプションの一部についてのデフォルトを設定するだけです。デフォルトはPREFIX/shareです。
--datadir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/share	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストールプログラムが使用する読み取り専用ディレクトリを設定します。デフォルトはDATAROOTDIRです。
--localedir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/share/locale	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	特にメッセージ翻訳カタログファイルのロケールデータをインストールするディレクトリを設定します。デフォルトはDATAROOTDIR/localeです。
--mandir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/share/man	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	PostgreSQL付属のマニュアルページがこのディレクトリ以下の、対応するmanサブディレクトリにインストールされます。デフォルトはDATAROOTDIR/manです。
--docdir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/share/doc/postgresql	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	「man」ページを除いた、ドキュメント一式ファイルをインストールするルートディレクトリを設定します。これは以下のオプションのデフォルトのみを設定します。このオプションのデフォルト値はDATAROOTDIR/doc/postgresqlです。
--htmldir=DIRECTORY	/usr/local/pgsql/share	(対応オプションなし)	installコマンドにてインストール先を指定する。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	インストーラのGUIにて指定可能。細かくその配下のディレクトリの指定は不可。	PostgreSQLのHTML形式化文書一式はこのディレクトリの下にインストールされます。デフォルトはDATAROOTDIRです。
--with-extra-version=STRING (設定なし)		extraver	(設定なし)	(設定なし)	PostgreSQLバージョン番号にSTRINGを追加します。これは、例えば、リリースされていないGitスナップショットからビルドしたバイナリや、git describe識別子やディストリビューションパッケージリリース番号のような追加のバージョン文字列のあるカスタムバッチを含むバイナリに印をつけるために使えます。
--with-includes=DIRECTORIES (設定なし)		(対応オプションなし)	-	(設定なし)	DIRECTORIESには、コンパイラがヘッダファイルを検索するディレクトリのリストをコロンで区切って指定します。(GNU Readlineなどの)オプションのパッケージが非標準的な場所にインストールされている場合、このオプションと、おそらく対応する--with-librariesオプションを使用する必要があります。
--with-libraries=DIRECTORIES (設定なし)		(対応オプションなし)	-	(設定なし)	DIRECTORIESには、ライブラリを検索するディレクトリのリストをコロンで区切って指定します。パッケージが非標準的な場所にインストールされている場合は、おそらくこのオプション(と対応する--with-includesオプション)を使用する必要があります。
--enable-nls[=LANGUAGES] (すべて指定)		nls	(設定なし)	○	各国語サポート(NLS)、つまり、英語以外の言語によるプログラムメッセージの表示機能を有効にします。LANGUAGESはオプションであり、サポートさせたい言語コードを空白で区切ったリストを指定します。例えば、--enable-nls='de fr'などとします(指定したリストと実際に用意された翻訳との論理積が自動的に計算されます)。リストに何も指定しなかった場合、利用可能な翻訳すべてがインストールされます。
--with-pgport=NUMBER	5432	(対応オプションなし)	-	インストーラのGUIにて指定。	サーバとクライアントのデフォルトのポート番号をNUMBERに設定します。デフォルトは5432です。
--with-perl (設定なし)		perl	(設定なし)	○ インストール後に機能を有効にするには、Perlの実行環境が別途必要。生成された共有ライブラリ(plperl.dll)からは、perl524.dllと依存関係があることが分かります。	PL/Perlサーバサイド言語を構築します。
--with-python (設定なし)		python	(設定なし)	○ インストール後に機能を有効にするには、Pythonの実行環境が別途必要。インストールされた共有ライブラリ(plpython3.dll)からは、python34.dllと依存関係があることが分かります。	PL/Pythonサーバサイド言語を構築します。
--with-tcl (設定なし)		tcl	(設定なし)	○ インストール後に機能を有効にするには、Tclの実行環境が別途必要。インストールされた共有ライブラリ(pltcl.dll)からは、tcl86t.dllと依存関係があることが分かります。	PL/Tclサーバサイド言語を構築します。
--with-tclconfig=DIRECTORY (設定なし)		(対応オプションなし)	-	(設定なし)	Tclは、Tclへのインタフェースモジュールを構築するために必要な設定情報を含むtclConfig.shファイルをインストールします。このファイルは通常、自動的に一般的に知られている場所にあります。もしTclの別のバージョンを使いたい場合は、検索対象のディレクトリを指定することができます。
--with-gssapi (設定なし)		gss	(設定なし)	(設定なし)	GSSAPI認証のサポートを構築します。多くのシステムでは、GSSAPIシステム(通常Kerberosインストールの一部)はデフォルトの検索場所(例えば/usr/includeや/usr/lib)にインストールされていません。そのため、--with-includesと--with-librariesオプションをさらに追加して使わなければいけません。configureは、処理を進める前にGSSAPIが正しくインストールされていることを確認するために、必要とされるヘッダファイルとライブラリを検査します。
--with-krb-srvnam=NAME	postgres	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	GSSAPIで使用されるKerberosのサーバプリンシパルのデフォルトの名前です。デフォルトでは「postgres」です。これを変える理由はWindows環境がない限り、特にありません。Windows環境がある場合は大文字のPOSTGRESに設定する必要があります。

■configureオプションの比較

- Windowsでソースからのインストールを実施する場合、config.plファイルを編集してオプションを記述します。
- config.pl上で設定できるパラメータと記述内容を[Windows - config.plへの記述方法]列に記載しています。

UNIX		Windows		インストーラでのインストールで設定されている内容	PostgreSQL Documentでの説明
configureオプションの記述方法	ソースからのインストール デフォルト値	configure.plへの記述方法	デフォルト値		
--with-icu	(設定なし)	icu	(設定なし)	○	Build with support for the ICU library. This requires the ICU4C package to be installed. The minimum required version of ICU4C is currently 4.2.
--with-openssl	(設定なし)	openssl	(設定なし)	○	SSL (暗号化) 接続のサポートを有効にして構築します。これには、OpenSSLパッケージがインストールされていなければなりません。configureは、処理を進める前にOpenSSLのインストールを確認するために、必要なヘッダファイルとライブラリを検査します。
--with-pam	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	PAM (プラグブル認証モジュール) のサポートを有効にして構築します。
--with-bsd-auth	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	BSD認証のサポートを有効にして構築します。(BSD認証フレームワークは今のところOpenBSDだけで利用可能です。)
--with-ldap	(設定なし)	ldap	(設定あり)	○	認証および接続パラメータ検索用のLDAPサポートを有効にして構築します。(32.17. 接続パラメータのLDAP検索および20.3.7. LDAP認証を参照してください。) Unixでは、OpenLDAPパッケージがインストールされていることが要求されます。WindowsではデフォルトのWinLDAPライブラリが使用されます。configureは、処理を進める前にOpenLDAPのインストールが十分されているかどうかを確認するために、必要なヘッダファイルとライブラリを検査します。
--with-systemd	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	systemdサービス通知のサポートを有効にして構築します。サーババイナリがsystemdの元で開始する場合には、これは統合を改善しますが、それ以外は影響はありません。詳細は18.3. データベースサーバの起動を参照してください。このオプションを使えるようにするには、libsystemdと関連するヘッダファイルをインストールする必要があります。
--without-readline	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	Readlineライブラリ(およびlibedit)の使用を防止します。これによりpsqlでのコマンドライン編集および履歴が無効となるため、推奨されません。
--with-libedit-preferred	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	GPLライセンスのReadlineではなくBSDライセンスのlibeditライブラリを優先して使用します。このオプションは両方のライブラリがインストールされている場合にのみ重要です。この場合デフォルトでReadlineが使用されます。
--with-bonjour	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	Bonjourサポートを有効にして構築します。これにはオペレーティングシステムがBonjourをサポートしていることが必要です。OS Xでは推奨します。
--with-uuid=LIBRARY	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	指定されたUUIDライブラリを使用して(UUIDを生成する関数を提供する)uuid-ossplモジュールをビルドします。
--with-osspl-uuid	(設定なし)	uuid	(設定なし)	○	--with-uuid=ossplに相当する古いものです。
--with-libxml	(設定なし)	xml	(設定なし)	○	libxmlを使用して構築します(SQL/XMLサポートが有効になります)。この機能のためにはlibxmlバージョン2.6.23以降が必要です。
--with-libxslt	(設定なし)	xslt	(設定なし)	○	xml2モジュールを構築する場合はlibxsltを使用してください。xml2はXMLのXSL変換を行うために、このライブラリに依存します。
--disable-integer-datetimes	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	日付時刻および時間間隔の格納に64ビット整数格納方式を無効にし、その代わりに浮動小数点で格納します。
--disable-float4-byval	(設定なし)	float4byval	(設定なし)	(設定なし)	float4値の「値」渡しを無効にし、「参照」渡しで渡すようにします。
--disable-float8-byval	32ビットプラットフォームの場合、デフォルト	float8byval	32ビットプラットフォームの場合、デフォルト	(設定なし)	float8値の「値」渡しを無効にし、「参照」渡しで渡すようにします。32ビットプラットフォームでは、--disable-float8-byvalがデフォルトで--enable-float8-byvalを選択することはできません。
--with-segsize=SEGSIZE	(設定なし)	1 (対応オプションなし)	-	(設定なし)	セグメントサイズをギガバイト単位で指定します。
--with-blocksize=BLOCKSIZE	(設定なし)	8 blocksize	8	(設定なし)	キロバイト単位でブロック容量を設定します。これはテーブル内のストレージとI/Oの単位です。8キロバイトのデフォルトはほとんどの場合適切ですが、特別な場合は他の値が役立ちます。値は1から32(キロバイト)の範囲の2のべき乗でなければなりません。
--with-wal-segsize=SEGSIZE	(設定なし)	16 wal_segsize	16	(設定なし)	メガバイト単位でWALセグメント容量を設定します。これはWALログ内のそれぞれ個別のファイルの容量です。この容量を調整するのに役立ちます。WALログ配送の粒度を制御するのに役立ちます。デフォルト容量は16メガバイトです。1から64(メガバイト)の範囲の2のべき乗でなければなりません。
--with-wal-blocksize=BLOCKS	(設定なし)	8 wal_blocksize	8	(設定なし)	キロバイト単位でWALブロック容量を設定します。これはWALログ内のストレージとI/Oの単位です。8キロバイトのデフォルトはほとんどの場合適切ですが、特別な場合は大きめの値が役立ちます。値は1から64(キロバイト)の範囲の2のべき乗でなければなりません。
--disable-spinlocks	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	PostgreSQLがそのプラットフォーム用のCPUスピンドックをサポートしない場合でも、構築に成功するようにします。スピンドックのサポートの欠落により、性能は悪化します。したがって、このオプションは、構築が失敗し、その原因が使用するプラットフォームでスピンドックサポートが欠落している場合にのみ使用してください。
--disable-thread-safety	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	クライアントライブラリのスレッドセーフを無効にします。これにより、libpqやECPGプログラム内の同時実行スレッドは、安全にその固有の接続ハンドルを制御できなくなります。
--with-system-tzdata=DIRECTORY	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	このオプションが使用されると、DIRECTORYにあるシステムが提供する時間帯データベースがPostgreSQLソース配布物に含まれるものの代わりに使用されます。DIRECTORYは絶対パスで指定しなければなりません。/usr/share/zoneinfoがオペレーティングシステムの一部でよく使われます。インストール処理が時間帯データが一致しない、またはエラーがあることを検知しないことに注意してください。このオプションを使用する場合、指定した時間帯データがPostgreSQLで正しく動作するかどうかを検証するためにリグレッションテストを実行することが推奨されています。
--without-zlib	(設定なし)	zlib	(設定あり、デフォルトで圧縮は無効)	(設定なし)	Zlibライブラリの使用を抑制します。これは、pg_dumpとpg_restoreにおける圧縮アーカイブのサポートを無効にします。このオプションは、このライブラリが利用できないごく少数のシステム向けだけのものです。

■configureオプションの比較

- Windowsでソースからのインストールを実施する場合、config.plファイルを編集してオプションを記述します。
- config.pl上で設定できるパラメータと記述内容を[Windows - config.plへの記述方法]列に記載しています。

UNIX		Windows		インストーラでのインストールで 設定されている内容	PostgreSQL Documentでの説明
configureオプションの記述方法	ソースからのインストール デフォルト値	configure.plへの記述方法	デフォルト値		
--enable-debug	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	全てのプログラムとライブラリをデバッグシンボル付きでコンパイルします。これは、問題を解析するためにデバッガ内でプログラムを実行できることを意味します。これはインストールする実行形式ファイルのサイズをかなり大きくし、また、GCC以外のコンパイラでは、通常はコンパイラによる最適化が行われなくなりますので、低速になります。しかし、デバッグシンボルが利用できるということは、発生した問題に対応する時に非常に便利です。現在のところ、GCCを使用している場合のみ、稼働用のインストールにこのオプションを使用することを推奨します。しかし、開発作業時やベータ版を実行する時は、常にこれを有効にすべきです。
--enable-coverage	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	GCCを使用している場合、すべてのプログラムとライブラリはコードカバレッジ試験機構付きでコンパイルされます。実行すると、これらは構築用ディレクトリ内にコードカバレッジメトリックを持ったファイルを生成します。詳細は31.5. テストが網羅する範囲の検証を参照してください。このオプションはGCC専用であり、また、開発作業中に使用するためのものです。
--enable-profiling	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	GCCを使用する場合、すべてのプログラムとライブラリがプロファイリング可能状態でコンパイルされます。バックエンドの終了時、プロファイリングに使用するgmon.outファイルを含むサブディレクトリが作成されます。このオプションはGCCを使用する場合のみ使用でき、開発作業を行う時に使用します。
--enable-cassert	(設定なし)	asserts	(設定なし)	(設定なし)	サーバにおける、多くの「あり得ない」状態をテストするアサーションチェックを有効にします。これは、プログラムの開発のためには測り知れない価値がありますが、このテストによりサーバはかなり低速になります。また、このテストを有効にしても、サーバの安定性が向上するとは限りません！アサーションチェックは、重要度によって分類されていませんので、比較的害がないようなバグでも、アサーション失敗をトリガとした、サーバの再起動が行われてしまいます。稼働用にこのオプションを使用することは推奨されませんが、開発作業時やベータ版を実行する場合は、これを有効にすべきです。
--enable-depend	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	自動依存関係追跡を有効にします。このオプションを使用すると、ヘッダファイルが変更された場合に、影響を受ける全てのオブジェクトファイルが再構築されるように、makefile が設定されます。これは開発作業時には有用ですが、単に一度コンパイルしインストールするだけであれば、これは無駄なオーバーヘッドです。現在のところ、GCC のみ、このオプションは動作します。
--enable-dtrace	(設定なし)	(対応オプションなし)	-	(設定なし)	動的追跡ツールDTraceのサポートを有効にしてPostgreSQLをコンパイルします。
--enable-tap-tests	(設定なし)	tap_tests	(設定なし)	(設定なし)	Perl TAPツールを使ったテストを有効にします。これにはPerlのインストールとPerlモジュールIPC::Runが必要です。詳細は31.4. TAPテストを参照してください。
(対応オプションなし)	-	iconv	(設定なし)	(設定なし)	Windowsの場合に、libxmlを使用する際にiconvが必要となるため、そのパスの設定。XMLサポートのために必要です。バイナリは http://zlatkovic.com/pub/libxml から、ソースは http://xmlsoft.org からダウンロードできます。libxml2はiconvを必要とすることに注意してください。同じ場所からダウンロードできます。